

銭形平次捕物控

紅い扱帯

野村胡堂

青空文庫

一

小網町二丁目の袋物問屋丸屋六兵衛は、とうとう嫁のお絹を追い出した上、せがれ 俵の染五郎を土蔵の二階に閉じ籠めてしまいました。

理由はいろいろありますが、その第一番に挙げられるのは、染五郎は跡取りには相違ないにしても、六兵衛のほんとうの子ではなく、藁わらの上から引取った甥おいで、情愛の上にくらか袴かみしもを着たものがあり、第二番の直接原因は、お絹の里が商売の手違いから去年の暮を越し兼ねているのを見て、ツイ父親に内証ないしよで五百両という大金を染五郎の一存で融通ゆうずうしたことなどが知れたためだと言われております。

しかし、もつともつと突込んだ本当の原因というのは、染五郎とお絹の仲が良過ぎて、ツイ舅しゅうとの六兵衛の存在を忘れ、五十になつたばかりの独り者の六兵衛は、筋違いの嫉妬しつとと、無視された老人らしい忿怒ふんぬのやり場に、若い二人の間を割さいたとも取沙汰されました。

丸屋六兵衛のしたことは、その頃の社会通念から言えば、いちいち尤もつともで、公事師くじしが束でかかつて、批弁の持込みようはありません。お絹は染五郎との仲を割かれ、泣く泣く

新茅場町の里方へ帰り、染五郎は小網町二丁目の河岸つ縁に建てた、丸屋の土蔵の二階に籠こもつて、別れ別れの淋しい日を送っているのです。

二人はしかし、生木なまきを割かれたまま、じつと運命に甘んじているにしては若すぎました。土蔵の二階に追い上げられて、しばらくの謹慎しんを強いられた染五郎が、まず思い出したのは、お絹が嫁入りする前のかつての日、ここから川を隔てて、新茅場町のお絹の家の裏二階と合図を交し合つた昔の記憶だったのです。染五郎の家の小網町と、お絹の家の新茅場町とは、陸地を拾つて行く段になると、右へ廻つて思案橋または親爺橋、荒布橋あらぬ、江戸橋、海賊橋と橋を四つ、左へ廻つて箱崎橋——一に崩れ橋くず——港橋、霊岸橋と橋を三つ渡らなければなりません、真つ直ぐに鎧よろいの渡しを渡れば眼と鼻の間で、丸屋の土蔵の二階窓から、お絹の里の福井屋の二階は、手に取るように見えるのでした。

染五郎はさつそく窓の格子こうしに手拭を出して見せました。千万無量の思慕を籠めた手拭が、ヒラヒラと夕風に翻ひるがえると、それを待ち構えたように、川を隔てた福井屋の二階欄干からは、赤い鹿かの子絞こしぼりの扱帯しきが下がるではありませんか。

「あ、お絹」

染五郎は思わず乗り出しました。欄干らんかんの赤い扱帯こそは、かつて恋仲だった頃のお絹

が、万事上首尾という意味を、川を隔てて染五郎に言い送る合図だったのです。この合図を受取った昔の染五郎は、何を措おいても鎧よろいの渡しを越えてお絹おぬいに逢いに行きました。

「若旦那、お楽しみですね」

そう言う渡し守すくの猾ずるそうな顔を見ると、染五郎はツイ余計な酒代さかてをはずまなければならなかったことなど——今はもう悲しい思い出になってしまったのです。土蔵の中に閉じ籠められている染五郎にしては、ここを脱け出して、川向うへ行く工夫はつきません。

こうして焦しょう躁そうの幾日か過ぎました。父親六兵衛の怒りは容易に解けそうもなく、そのうちに丸屋の親類や仲人の出入りの激しくなる様子を見ると、いよいよ嫁のお絹を離別するつもりになったことが、土蔵の中の染五郎にもよく判るのです。あれほど染五郎が目をかけてやった店中の者は、主人六兵衛の眼を怖おそれて一人も近づかず、三度の物を運んでくれる小僧の留吉だけは、何かと心配をしてくれませんが、十三や十四の少年では、染五郎の憂ゆう悶もんを救う工夫ありません。

その中にたつた二人、染五郎とお絹の割かれた仲に同情してくれる者がありました。一人は石巻左陣いしまぎざじんという浪人者で、丸屋の裏に年久しく住み、袋物の内職をさせて貰いながら、染五郎に道楽の指南をした中年男。もう一人はお半おはんといって丸屋の掛かり人うじですが、死

んだ六兵衛の女房の姪めいで、とつて二十二になる小意気な年増女です。

「若旦那」

「あ、お半か」

染五郎は不意に階下したから声を掛けられて、窓格子にしがみ付いた顔を離しました。

「可哀想に、お絹さんが合図をしていますね」

「……………」

お半は何もかも知っていたのです。

「呼んでおあげなさいよ、若旦那。——これつきり別れ話になると、お絹さんは生きちやいませんよ」

お半はホロリとするのです。小意気ではあるが、自分の醜さを意識しているお半は、お絹と染五郎の仲を、犠牲的な心持で同情してやっているのです。

「どうすればよいのだ、お半」

「鎧の渡しは人目に立つが、大廻りに橋を渡って来る分には、江戸の街に関所はありやしません。暗くなったらここへ来るように、合図をして御覧なさいよ」

「合図」

「赤い扱帯しじきがへ万事上首尾、忍んで来い」という合図じやありませんか」
「えッ」

「私が知らないと思つていらつしやるの、若旦那。——長いあいだ見せつけられたんですもの、どんな事でも見通しよ。ホ、ホ」

お半は少し蓮はすつ葉はに言つて、笑いを噛み殺すのです。

「？」

「若旦那の方から行かれないんだから、こんどはお絹さんが通う番じやありませんか。合図をして御覧なさいよ。——扱帯は私のもも間に合わないことはないでしょう」

くるくると解いたお半の扱帯、同じ緋鹿ひかの子絞こしぼりを、自分の手で土蔵の窓からサツと、外へ投げかけました。

川を隔てて、それを見たお絹は、どんな転倒した心持になつたことでしょう。このとき福井屋の二階のほのめく物の影は、欄干らんかんに乗出してジツとこちらへ見入るのが、夕陽の中に白々と浮き上がるのです。

その翌^{あぐ}る朝、丸屋六兵衛の死体は、店と土蔵の間、ろくな陽の当たらない、ジメジメした路地の中に発見されました。

「わーッ、た、大変ッ」

張りあげたのは小僧の留吉です。

「何だ何だ」

飛出した多勢の中には、番頭の宗助も、掛り人のお半も、下女のお角も、手代^{まき}の竹松もおりました。

傷は浴衣^{ゆかた}の後ろから一と突き、路地一パイに浸す血潮の中に、頑固^{がんこいつてつ}一徹で鳴らした六兵衛は、石つころのように冷たくなっているのです。

そこに集まった人数は、互に顔を見合わせるばかり、しばらくはどうしていいのか見当も付きません。

「旦那様」

番頭の宗助は、ともかく主人の死体を抱き起しましたが、そんな事をしたところで、呼び生けられるわけでもなく、ただ恐ろしい沈黙を破って、自分の息づまる心持^{まき}を紛らすだ

けのことです。

「何だ何だ」

木戸の外から声を掛けたのは、庭下駄をつっかけて、房楊子ふさようじをくわえた浪人者の石巻左陣でした。三十二三の総髪、袋物の内職もやれば下手な占いもやるといった、器用貧乏の見本のような男、武芸も学問も大したものではない代り、口前と男前だけは相応です。

「あ、石巻さん、主人が——」

宗助は助け舟が欲しそうに乗出しました。

「これは大変。——だが、そんなに荒らしちゃ後が困る、無暗むやみに足跡をつけないように。

——それから、外科と町役人に飛ぶんだ。若旦那はどうした、この騒ぎの中に見えないよ
うだが」

さすがに浪人者の左陣は落着いております。

「蔵の二階ですよ」

お半は口惜くやしそうでした。

「そいつは一番先に出さなきや。——窮きゆうめいも時によりけりだ」

こうなると石巻左陣が命令者でした。

一人は外科へ、一人は町役人へ、一人は土蔵の扉を開けて若旦那の染五郎を出すため、左陣は生なましめ湿りの路地に足跡をつけるのを嫌って、大廻りに店口の方から入って来ました。まもなく飛んで来た外科は、一と眼に引導を渡してしまいました。傷は後ろから一と突きしたものの、たぶん声も立てずに死んだことでしょう。それと前後して、町役人と一緒に乗込んで来たのはガラツ八の八五郎でした。近所まで用事があって、暑くなる前に片付けるつもりで来たのが、フト順風耳はやみみに入った丸屋六兵衛殺しを、手柄にするつもりもなく覗のぞいたのです。

「おや、八五郎親分」

道楽者の石巻左陣は、こんな調子で迎えました。

「大変なことになりましたね、石巻さん」

「後ろからやられているんだから殺しには違いない。八五郎親分の良い手柄になるぜ」
左陣はそんな事を言いながら、いろいろの事を説明してくれるのでした。

丸屋の六兵衛と倅の染五郎の関係、嫁のお絹を里へ帰して染五郎は今朝まで現に土蔵の二階に押込められていたこと、丸屋の主人は頑固で一徹者だが、商売熱心というだけで、人に怨うらみを買うような人間でないこと。

「盗られた物はなかったのかな、番頭さん」

「へエ、何にも盗られた様子はございません。主人は金のことはまことに几帳面な方で、私の知らない出入りはないはずでございますから」

ガラツ八の問いに対して、宗助は揉み手をしながらこう言うのでした。

「この木戸は開いていたのかな」

ガラツ八は路地から河岸つ縁に通ずる、粗末な木戸を指しました。

「開いていましたよ」

死骸を見付けた小僧の留吉です。

「多勢で踏み荒らしちや何にもならないから、ここへは人を寄せ付けないようにしたんだが——」

そう言いながら左陣は湿った土の上を指しました。よく見ると、死骸のあつた場所から店の方はさんざん踏み荒らして、何が何やらわかりませんが、死骸から木戸まで三四間ほどの間は、左陣の注意でよく保存されたらしく、透かして見ると、小刻みの足跡がはつきり読めるのです。

「ここはあまり人が通らないのか」

「滅多に通りません。暗くて陰気で、いつでもジメジメしておりますから」

番頭の宗助は注を入れました。足跡をよけて木戸の外へ出ると、河岸つ縁は初秋の陽が一パイに射して、カツとするような明るさ、鼻の先の鎧よろいの渡しを隔てて、向う河岸の家並が、人間の表情まで読めそうに見えるのでした。

「お、あれはどうした？」

ガラツ八は土蔵の二階窓を振り仰ぎました。そこからは赤い鹿の子絞りの扱帯しづぎが、仕舞い忘れた洗濯物のように、朝風にハタハタと動いているではありませんか。

「ヘッ、気が付きましたかえ、親分。あいつは合図なんです」

小僧の留吉が応じます。

「合図？」

「若旦那が、新茅場町の福井屋に帰っている、御新造ごしんぞへの合図を送ったんで。ヘッ」

「お黙りッ」

お半は我慢のなり兼ねた様子で留吉の耳を引っ張りました。

「痛いじゃないか、お半さん」

「お前は本当におしやべりだよ。子供はそんな事を言うもんじゃない」

「チエツ」

「いや、言ってしまった方がいい。——その合図はどうしたんだ」

ガラツ八の八五郎はあわてて口を入れました。

「親分さん、小僧の言うことなどを真まに受けないで下さい。そいつは何でもありませんよ」
お半は必死の調子でその場を繕つくろいますが、土蔵の窓に下がった赤い扱帯の秘密は、ガラツ八の注意をひしとつかんで容易にわき目を振ろうともしません。

三

「親分、大手柄ですよ」

その晩ガラツ八の八五郎は、鳴物入りで平次の家へ飛込みました。

「何だ騒々しい、一番槍一番首といったような手柄かい」

錢形の平次は夕飯の膳を押しやって胸いっぱいきょうらうくの涼風を享きょうらうく樂らくしている姿です。

「冷かしちやいけません。——小網町の丸屋殺しけしゆにんの下手人を、たった半日で挙げたのは大したことでしょう」

「なるほどそいつは手柄だが、——誰がいったい下手人だったんだ。詳しく話してみるが
いい」

「碎染五郎との仲を割かれた、嫁のお絹というのが下手人ですよ。この春祝言したばかり、
二十歳というにしては初々しく、縄を掛けながらあつしもほろりとしましたかね」

「なるほどそいつは虐たらしいな」

「まるで白木屋お駒か、八百屋お七を縛るようでしたよ。骨細で、華奢で、子供子供し
た顔が真つ青で、泣きもどうもしないが大きな眼を見開いて——」

「そんな念いまでして、手柄を立てたいのかな、八」

「だって、外面如菩薩、内心如夜叉というんでしょう。あつしは目をつぶって縛りま
したよ」

「それほど動かない証拠があったのか」

「証拠はあり過ぎるくらいで、——第一、染五郎と割かれて、うんと舅を怨んでいるでし
ょう」

「フーム」

「川の向うから合図をして、ゆうべ染五郎に逢いに来ている。——土蔵に閉じこめられた

染五郎は、ノコノコ出かけるわけには行かないから女の方が通ったことは、小僧の留吉も、鎧の渡し守の渡し守も知っていますよ」

「……………」

「木戸を開けて入って、そこから出て行ったのは、足跡でわかりましたよ。足跡は小さい駒下駄で、お絹のものに間違いはないし、木戸は外からでも開くことは、家の者だけが知っている」

「それから」

「刃物は短刀で、川をさらわせると、わけもなく出て来ましたよ。こいつはお絹の嫁入り道具の一つだ」

「その短刀はどこにあったんだ」

「木戸のすぐ外、土蔵の下ところに投^{ほう}り込んでありましたよ。引^{ひき}潮^{しお}になると見えるくらいで、——もつとも傷口に比べると少し細刃でしたが」

「お絹は渡し舟で来たのか」

「いえ、人に顔を見られるのが嫌だから、江戸橋を廻って来たんだそうで、これは本人が言うんだから間違いはありません。鎧の渡し守は、仕舞い舟を出そうとして、客をあさる

ともなく眺めていると、丸屋の木戸へ若い女が入るのを見たそうで

「なるほど、証拠はそろっているな」

平次は何か腑ふに落ちないものがある様子です。

「でしよう、親分」

「少し揃いすぎているよ」

「？」

「木戸の中の足跡は小刻みに付いていたと言ったな」

「へエ——」

「乱れてはいなかったのか」

「へエ」

「人を殺した若い女が、お能の橋がかりを引込むように逃げられるものかな」

「？」

「親爺橋、江戸橋、海賊橋と廻って帰るなら、血の付いた短刀だってわざわざ木戸の外へ捨てるに及ぶまいよ。傷口と短刀の合わないのも変だ」

「……………」

「嫁の道具はまだ返していないはずだ。その荷物の中から、わざわざ自分の短刀を持出して、舅を殺すのはどういう料簡りょうけんだい」

「？」

こう平次に畳み込んで来られると、せっかくガラツ八の築き上げた疑いが、はなはだ怪しいものになります。

「証拠が揃いすぎるよ、八」

「……………」

「他に怪しい奴はないのか」

「ありませんよ。番頭の宗助は子飼いの忠義者だし、手代の竹松は宗助と枕を並べて寝ているし、あとは通いの職人ばかり」

「それから」

「掛り人かかうれのお半というのは無類のお人好しで、顔はまずいが気立ての良い女だ。染五郎とお絹のことというと夢中になる」

「そいつは幾つだ」

「二十二三でしょうね、嫁の口を諦め切ったあきらような年増ですよ。——でも小意気な小股こまたの

切れ上がった、ちよいと踏めないことはありませんが」

「それつきりか」

「あとは小僧の留吉と、店子たなごの浪人石巻左陣と——」

「その敵役みたいな浪人は何だい」

「丸屋の袋物の内職をさせて貰って、ちよいちよい当らない占いもやります。三十二三の浪人者で、好い男ですよ」

「……………」

「路地の足跡や、川の中の短刀はみんなその浪人が見付けてくれました。見掛けによらない才智者で、うんと褒めてほやると、——こいつは兵法の一つだから、何でもないよ、なんて脂下やしきがついていましたか」

「岡っ引も兵法の心得が要るようになったのかな」

平次はそんな事を言いながら、何やら深々と考え込んでしまいました。

四

「親分、大變ッ」

翌る朝、ガラツ八の大變が鳴り込んで来ました。鬚まげぶし節が少しゆるんで拳固げんこで額際の汗を撫なであげる様子は尋常ではありません。

「何が大變なんだ、相変らず御町内の子供衆を皆んな虫持にするぜ、少しはたしなめ」

「落着いていちゃいけませんよ、親分。三輪みのわの万七親分が乗出して、小網町を小半日させつていると思つたら、何に目星をつけたか、お半を縛つて行きましたぜ」

「何？ 三輪の兄哥あにきがお半を縛つた？」

「だからあわてもするじゃありませんか、ね親分。何とかして下さいよ」

「お絹を縛るより確かだぜ、八」

「親分までそんな事を言つていちゃ、あつしは丸潰まるつぶれだ。お半という女は、そりや醜い女に違いないが、若旦那と嫁の間を一所懸命取持とうというほどの善人ですぜ」

「お前の鑑定めききが当てになるものか。とにかく行つてみるとしようか」

「有難え、そう来なくちや」

銭形平次はとうとう八五郎に引つ張り出されました。

「お前の面を丸潰れにするでもあるまいと思うから出かけるんだが、別に下手人の当てが

あるわけじゃないよ」

「でも、親分が乗出して下されば、何とか眼鼻が付きますよ」

ガラツ八にしては、平次が顔を出しさえすれば、自分の不面目が救われるような気になっていた。が、ガラツ八が報告してくれた以外には、何の新しい発見もありません。

「土蔵の鍵は誰が持っていたんだ」

「店にありますから誰でも持出せます。若旦那を窮命させる心持さえ通ればよかつたんで、番頭の宗助は実直らしい額を撫でるのです。」

「その晩若旦那は誰と誰と逢ったんだ」

平次の問いは染五郎に向けられました。

「お半に二度、お絹に一度逢いました」

「お絹さんが来た時刻と、帰った時刻は？」

「戌刻いっつ（八時）過ぎに来て亥刻よつ（十時）前に帰りました」

染五郎は昂然こうぜんと応えるのです。天地神明に恥じないといった態度です。一つはお絹を縛ったガラツ八に対する反感もあつたでしょう。

「その後では？」

「お半が来て床を敷いてくれました。それつきりです」

「お半は主人を怨んではいなかったのかな」

「そんな事はありません。孤みなしご児こになって困っているのを引取ったくらいで——それに気の良い女ですから、この恩を返したいと言いつづけていました」

染五郎の言葉には、何の陰影もなかったのです。

それからもういちど番頭に会って、帳面のことを訊くと、

「こんな事はないはずですが、よく調べてみると、旦那のお手許に差上げた金のうちから、

二三百両不足しております。金箱も用ようだんす筆筒も錠しつか前かが確りしかしておりますから、泥棒が入

つたはずもありません」

宗助はおよそ腑ふに落ちない顔をするのでした。

「親分」

宗助の後ろ姿を見送って、ガラツ八はそつと耳打ちをします。

「あの番頭が怪しいというのか。——そんな事はないよ。自分さえ黙っていれば、誰も気の付くはずのない金の不足のことを言うんだもの。日本一の正直者さ」

外へ出てみると、店と母屋おもやが土蔵に並んでギョウギョウに建った上、その奥には長屋が二軒、一軒は石巻左陣の浪宅で、一軒は空いたまんまです。

「覗いてみましょうか、親分」

ガラツ八が誘うまま、平次も勝手口の方から枝折戸しおりどを押して、石巻左陣の浪宅の前に立つておりました。

「お、これはこれは錢形の親分」

左陣は内職の袋物を押しやって、秋の陽ざしの中に顔を出しました。これで武芸学問の心掛けがあつたら、三百石にも踏めそうな人柄です。

「石巻の旦那ですか、とんだお邪魔をします」

「なんの、邪魔どころか、私はとんだ物好きで、捕物が面白くて面白くて仕様がないのさ。その後どうなつたえ、親分」

「一向眼鼻が付きません。いずれこの八五郎が縛ったお絹か、三輪の親分の縛ったお半か、どつちかが下手人でしょう。旦那のお考えはどうです」

「そいつは判らないね。——だが、お絹さんは下手人にしては綺麗過ぎるよ、ハツハツハツ。そんな事を言ったら、玄人くろうとに笑われるだろう。それに、自分の使った短刀を、わざ

と見えるように土蔵の側の川の浅いところへ投り込む奴もあるまい」

「なるほどね」

平次は早くも見破ったことですが、左陣の話を聴くと、平次は今さららしく神妙に感心して見せるのでした。

「だが、お半も気の良い女だ。恩人を殺すはずもないように思うが——」

石巻左陣は内職の占いをする時のように、尤もらしく首を傾げるのです。

五

番屋へ行つてみると、お半はすっかり潮垂れて、運命を待つ姿でした。その側で口書きを取っているのは、得意満面の三輪の万七、お神楽の清吉。

「お、銭形の、御苦労だね」

こういつた調子です。

「三輪の兄哥、八の野郎がとんだ縮尻をやったそうで、面目次第もないが。——お半の方は白状したかえ」

平次はひどく下手に出ました。

「しぶとい女でね、判り切ったことをまだ白状しねえのさ。お絹の嫁入り道具の中から、短刀を持出せるのは、奉公人じやあるまいから、まずお半に決ったようなものだ。それに、あの晩おそくお絹が帰ってから、土蔵の中へ行つて染五郎に逢つたお半は、ひどくソワソワしていたそうだよ。よく調べてみると、その晩着ていた単衣ひとえにも、ほんの少しだが血が付いていたぜ」

三輪の万七は得意そうでした。

「なるほどそう聴けば疑いはないが、ちよいとその短刀を見せてくれ——鞆さやごと川の中に捨ててあつたんだね。——誰も拭きやしなかつたかい、これを」

「拭くものか、潮水の滴たれるまんま持つて来たんだ」

「それにしちや血の跡もないぜ」

「拭いたんだろう」

「いや、鞆に入れて捨てる短刀を、わざわざ拭くはずはない。——拭いても脂あぶらくらいは浮いてるはずだが。——この鞆はよく出来ていると見えて、ろくに潮も入っちゃいない、いま磨といだばかりという刃の色だ。——それに傷にしちや短刀が細過ぎるね」

「……………」

「お半。——お前は言いにくかろう。——人殺しよりもっと恥かしい事をしたんだから、
——だが、それじゃ済むまいぜ」

平次は短刀を元の場所におくと、しずかにお半の方を振り返るのでした。

「……………」

「お前は主人殺しの罪を引受けて、はりつけばしら磔はりつけばしら柱はりつけばしらを背負うつもりだろう。が、そいつはつま
らない料簡だ。お前のした事はよくない事だ。女としてはこの上もなく恥かしい事だが、
命まで投げ出すことじゃあるまい。どうだ、お半。俺は何もかも判ったような気がするが、

——

平次は諄しゆん々じゆんとして説くのでした。三輪の万七と八五郎のガラツ八は、ただ呆あつけ気に取
られるばかり。

「親分さん。私が悪うございました」

お半は堅い表情が崩れると、いきなりヒステリックに泣き出したのです。

「よいよい本当の下手人さえ挙げれば、三輪の親分もお前には用事はあるまい。お前が言
いにくいなら聴かない事にしよう」

「親分」

「八、お前は気の毒だが、石巻左陣さんと呼んで来てくれ。短刀を鑑定して頂きたいから
つて、いいか」

「へエー」

平次の言葉の意味を測り兼ねた様子ですが、八五郎は何にも言わずに飛出しました。その後ろ姿を見送って、そつとつづく平次、物蔭に身を隠して、ガラツ八に誘い出されて行く石巻左陣の姿を見ると、入れちがいに、左陣の長屋に滑り込みました。

第一番に上がりかまち框、下駄箱、落しと手早く覗いて、女下駄の古いのを一足見付けると、その底に付いた新しい土を爪で触つてみて、それからたつた二た間しかない家の中を、疾ついで風のごとく調べあげました。

「無い」

しばらくすると、平次はがっかりして外へ飛出しました。狭い家の中は天井裏から床下まで調べあげましたが、捜すものが見付からない先に主人の石巻左陣が帰って来たのです。それを見ると、

「これは何だ」

石巻左陣はサツと顔色を変えました。

「気の毒だが、少し見せて貰いましたよ」

平次はニヤニヤしております。

「これでも二本差だぞ、留守中に入って済むと思うか」

左陣は叱咤しつたします。その後ろから心配そうに覗くのはガラツ八の顔です。

「こんなものを見付けましたよ、石巻さん」

「その下駄がどうした」

「丸屋の木戸の中にあつた足跡にピタリと合いますよ」

「女子供の下駄はたいい同じようなものだ、それがどうした。——尾羽打おはうちか枯らしている

がこれでも武士の端くれだぞ。何のために人の家へ入つた。まずそれを言えッ」

石巻左陣は日頃の穩和さを失つて、怒気を含んだ顔が紫にさえ見えるのでした。

「血染の脇差と、——もう一と品。——金の包を捜しましたよ」

「そんな物はあるまい」

左陣はニヤリとしました。が、その眼はしかし妙な方角へ——。

「判つた、八。その下水の中を見ろ、石を起すんだ。俺はこの野郎と一と汗掻く」

「何を無礼」

「御用だぞツ」

平次はパツと石巻左陣に飛びかかったのです。

この捕物は、平次にしては思いのほか楽でした。奸智かんちにだけ長たけて、武芸の心得の怪しい石巻左陣を取って押えると、ちようど八五郎は、下水の蓋みかげいしになっている御影石みかげいしを起して、その下から三百両の金包と、碧血斑へきけつはんはん々たる脇差を捜し出したのでした。

「親分、この通りだ」

「八、お前の顔も立ったぞ」

「有難え」

*

お絹もお半も許され、お絹はまもなく丸屋に戻って、染五郎と睦むつまじく暮しました。

石巻左陣は丸屋六兵衛殺しの罪状が明らかになって、死罪になったことは言うまでもありません。その罪状というのは、丸屋六兵衛に後添いを世話すると持込み、その仕度金を

三百両受取つて、急に金が欲しくなり、世間体をはばかりる丸屋六兵衛をあざむき、夜陰におびき出して刺し殺したのです。その頃丸屋の嫁が里に帰され、染五郎と逢引の合図を交しているのを見て、悪賢い左陣は、女下駄で足跡までこしらえて罪をお絹に転嫁しましたが、川に捨ててあつたお絹の守り刀については、不思議なことに何にも知らなかつたのです。

「不思議じゃありませんか。ね、親分。あの川の中から見付けた、お絹の短刀はどうしたことでしょう」

一件落着してから、ガラツ八が最後の疑いを平次に持出すのも無理のないことでした。

「あれは俺にも判らなかつたよ。しかし、お絹の荷物の中から短刀を盗み出せるのは、お半の外にはないことを考えると、すぐ判つたんだ」

「へーエ？」

「お半は根が悪い女じゃあるまい。自分が見つともないのを百も承知で、染五郎とお絹の間を取持ち、二人を一緒にしてやつたくらいだもの。でも、やはり女だ。子供の時から一緒に育つた染五郎をお絹に取られて、口惜くやしいと思う心持はどこかにあつたんだらう。その嫉妬を恥かしいことだとは百も承知しているか、二人の仲があんまり睦まじいを見る

と、ついムラムラツとしたのだろう」

「へエ——つまらねえ女ですな」

ガラツ八にはその微妙な心持がわかりません。

「あの晩路地の中で主人の六兵衛が殺されているのを見ると、これがお絹のせいだったら、自分のところへ染五郎が転げ込まないものでもあるまいと思つたのさ。お絹の短刀を持出して、一度は死骸の側に捨ててつもりだったが、それもあんまり気がとがめるので、路地の中から木戸を越して川へ投げ込んでしまった」

「それは本当ですかえ」

「お半に聴いたわけではないが、多分その通りだろうと思う。——だから、下手人の疑いは晴れたが、お半はその日のうちに房州の遠い親類のところへ行つてしまった。二度と丸屋へ歸つて、夫婦の睦まじいところを見る気はあるまい」

「へエー。怖い女ですな」

「あんなことさえしなきゃ、一生善人で通る女さ。フトした心の迷いだ。あんまりほじくり出すのも可哀想だから、俺は知らん顔をして逃がしてしまつたよ。もつともこの殺しは最初から女の細腕ではあるまいと思つたよ。あんな建^{たて}込^こんだ中で、たった一と突きで人を

殺せるのは、何といつても大した手際だ」

相変らず平次は、そういつた男だったのです。が、ガラツ八にとっては、この醜い女お半は、妙に忘られない人間の一人でした。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（十四）雛の別れ」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年8月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物全集第十七巻 権八の罪」同光社磯部書房

1953（昭和28）年10月10日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1942（昭和17）年9月号

※副題は底本では、「紅い扱帯《しごき》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2016年9月9日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

紅い扱帯

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>